日本映画論言説大系

全30巻

映画生誕百余年の足跡を集大成する映像理論詞華集

◆監修

牧野　守　日本映画史

◆解説（50音順）

アーロン・ジェロー
イエール大学

阿部 マーク・ノーネス
ミシガン大学

板倉史明
東京国立近代美術館フィルムセンター

入江良郎
東京国立近代美術館フィルムセンター

加藤厚子
日本近代史／お茶の水女子大学

小林貞弘
映画史

曽根幸子
映像美学

田島良一
日本映画史／日本大学

田中眞澄
日本映画史・文化史

十重田裕一
日本近代文学／早稲田大学

那田尚史
実験映像・個人映像・小型映画

波多野哲朗
芸術学・映画学

ピーター B. ハーイ
名古屋大学

藤木秀朗
映画史・映画理論／名古屋大学

牧野　守
日本映画史

村山匡一郎
映画評論・映画史

全巻堂々完結

ゆまに書房 YUMANI SHOBOU

創造的な映像理論の成立のために

日本映画史研究家
牧野　守　MAKINO Mamoru

21世紀の現在、映像表現の万能社会に対応するために、その源流を形成している映画が改めて問い直されようとしている。特に、生誕百年を越えた映画は、幾度かの黄金期を経るなかで、数多くの名作が世に送り出され、今日もその名を留める優れた作家が出現した戦前に注目し、我が国の独自な表現様式が確立したことに対する実証的な解明が始まっている。そしてその時代には、アクチュアルな批評ジャンルが形成されており、数々の運動を通じての華々しい論争が展開された映画状況が浮び上ってくる。このような時代と密接に関り合った映画理論が、我が国のユニークな映画の形成に、大きな役割を果したことを無視することは出来ない。

それは映画美学、映画芸術といった本質的な分野の確立から、作品論、作家論といった批評、また創造理論の分野、そして、今日のメディア論の展開に直結する、受容に関わる分野など、大衆娯楽から国家規制、或いは植民地・占領地の文化政策のトップランナーといった分野にまで、積極的に関連付けられるのである。

この大系は、このような歴史的な映画状況を基盤にして三期に区分した。即ち草創期の模索段階から、花開くモダニズム期、そして戦時下の映画統制期である。その時代的特徴に基づき、それぞれを10巻ずつ、計30巻にまとめた。海外から導入された理論は除き、オリジナルな我が国の理論的発展経緯をふまえて、発表当時の反響の大きかった代表的な理論や言説、そしてそのドキュメントのなかから抽出したアンソロジーを、今日第一線で活躍する映画史家、研究者による個別の解説を付して系統立てたものである。

本書の特色

画期的な試み

日本映画の草創期から、昭和20（一九四五）年、戦前期までの基本文献および理論書を、稀覯書を中心に全30巻の大系にまとめた初の試みです。

稀覯本を多数収録

朝鮮映画の歴史の空白を埋める幻の書、高島金次著『朝鮮映画統制史』を収録。このほかにも今日では入手が困難なもの、稀少性が高いものを多数収録しています。

詳細な解説

各巻末には、気鋭の研究者により、「映画」を時代のキー・ワードとして解明するべく、その著書や著者、および刊行時の時代状況、その潮流の背景にまで言及した詳細な解説文を付しました。

テーマ別に集成

全30巻を全三期に分類。各期にはそれぞれにテーマが与えられ、第Ⅰ期「戦時下の映画統制期」、第Ⅱ期「映画のモダニズム期」、第Ⅲ期「活動写真の草創期」、各期ごとに時間軸を遡った順序になっています。

日本映画論言説大系　全30巻の収録内容

▼第I期▲戦時下の映画統制期

◆第1巻◆

映画の認識

上野耕三著／第一芸文社／昭和15年

映画における芸術性と科学性の視点から、主観と客観の認識の差異を追及した刺激性に溢れた論考である。昭和期プロレタリア映画運動のオルガナイザーの一員であった筆者は、運動崩壊後は評論家として活躍、映画の果す役割を主体的に捉え積極的に問題提起をおこなった。特に哲学者の戸坂潤や、彼の主宰する唯物論研究会のメンバーたちを捲き込んで展開した論争が、この時代背景となっている。

†解説〔牧野　守〕

文化映画論

相川春喜著／霞ヶ関書房／昭和19年

プロレタリア科学、日本の資本主義の技術分析で知られた筆者が転向を経るなかで、戦線に召集される極限状況下で書きおろした局外者である筆者の唯一の映画書、ドキュメンタリー理論である。この頃大きな影響力のあったポール・ローサなどの、海外の理論と異なる立場からの独自の解釈により、映画を媒体として時代にどう迫るかという意識がこの著書の底流をなしている、と評された点でも意欲的な映画論である。

†解説〔牧野　守〕

◆第2巻◆

映画教育の理論

関野嘉雄著
小学館／昭和17年

筆者は戦時統制下を代表する映画教育理論のスポークスマン的存在として知られている。早くから映画教育運動のリーダーとして活躍、教育分野に止まらず映画の果す役割を重視し、映画本来の価値を追及、基本的理念に関わる啓蒙的役割を果した。特に本書は、当時注目を集めたポール・ローサのドキュメンタリー映画論の翻訳をめぐり、独自な見地から果敢に批判をくりひろげた言説が基調となっている。このようにして彼の理論的集大成と称された本書は、様々な論争のコアとなった。

†解説〔対談：牧野　守・村山匡一郎〕

◆第3巻◆

映画と文化

清水光著／教育図書／昭和16年

映画美学、芸術論の先駆者である筆者の数少ない理論書である。モホリ・ナギやレジェなどの絶対映画、純粋映画など海外の実験映画やアバンギャルド映画理論の紹介を通じて映画表現の様式や複製芸術としての技術分野などで多様な問題提起を果した。大正期末から京大の美学グループの中心的な存在であり、中井正一たちの芸術運動にも関わり大きな足跡を残したが、活動が関西中心であったために、今まで本格的に評価されなかった。時代の証言者として貴重である。

†解説〔那田尚史〕

◆第4巻◆

映画・表現・形成

長江道太郎著
教育図書／昭和17年

映画の本質をその原初にさかのぼって追及した本書は、出版規制が行なわれた戦時下に刊行されたことが、当時でも理解されず、かえって難色を示されたほどの異色の映画芸術論集。国策映画論争の渦中の論壇に背を向け、映画の表現の可能性を、時間と空間設定のなかでどう追及するのか、という永遠の課題に迫る先駆的文献。筆者は学生時代にプロレタリア文化運動によって逮捕され、様々な試練を経て映画評論の道を歩むことになった。本書はその処女評論集である。

†解説〔曽根幸子・牧野　守〕

◆第5巻◆

日本映画論

長谷川如是閑著
大日本映画協会／昭和18年

この時代を特徴付ける理論的傾向として、局外批評という他の芸術、メディア分野からの作品論や作家論、そして映画の機能や受容といった本質的な言説が多様なスタイルで提示された。そのもっとも代表的な人物の理論が本書である。筆者は大正から昭和期にかけて、ジャーナリスト、作家、文芸評論家、そしてリベラルな社会批評家として反ナチズムの言動などで知られていた。しかし、昭和10年ごろから時勢の潮流のなかで次第に日本の伝統的文化の解明と再評価といった方向に変貌することで戦争肯定や愛国主義、ウルトラナショナリズムへの批判の姿勢を捨てなかった。しかしながら、実は映画論壇は従来の映画評論家などの言説を超えて、国策的な立場からの映画理論が輩出、それが局外批評を生ずる社会的な要因となった。筆者の理論は映画の本質と日本的芸術性と、その特徴を捉えたユニークな展開によって刺激を与えた。

†解説〔波多野哲朗〕

◆第6巻◆

現代映画論

沢村勉著／桃蹊書房／昭和16年

学生時代から映画評論でスタートし、社会に出てからは映画ジャーナリストとして映画理論の構築を志向した筆者は、やがては戦時中の国策映画の代表的なシナリオライターとして、多数の創作活動で注目された。この様な経歴を土台とした創造理論は本書の翌年に刊行された『映画の表現』とともに、国民映画、映画政策、映画の国家管理までもターゲットにして、時代状況を分析するという論点の広がりをもつ、現場からの数少ない発言としてもユニークである。

†解説〔ピーター B・ハーイ〕

◆第7巻◆

映画評論集

杉山平一著／第一芸文社／昭和16年

文芸評論家であり詩人でもある筆者はまた、映画評論分野でドキュメンタリー映画理論のチャンピオンである。今村太平と肩をならべてデビューしたことでも異色の存在であった。文学と映画、シネ・ポエムという新境地を開拓、言語と映像のイメージの世界に理論を通じて参入した本書は、まさに国策映画の厳しい時代要請とは無縁の、本格的な表現技術の理論書として興味深い内容である。戦時色一辺倒のカーキ色の時代にあっても、大正・昭和のモダニズムの開花が如何に継承されているかを知ることが出来る。

†解説〔田中眞澄〕

芸術小論集〈抄録〉

谷川徹三著／生活社
昭和18年

哲学者・文芸評論家として著名な筆者は、実は草創期からの映画研究のパイオニアとしても関わり合いが深い。我が国最初の外国理論文献ミュンスタアベルヒ『映画劇―その心理学と美学』（大正13年）の訳者・久世昴太郎とは彼のペンネームである。その谷川が京大美学のメンバーと理論誌を創刊、映画理論の活動に参加、やがては戦時下の我が国の映画統制委員として活躍した。その独自の経過によって形成された映画理論は、海外の名作の知的な分析などを通じて、水準の高い芸術性と思想性を示している。

†解説〔曽根幸子〕

◆第8巻◆

第七十四回帝国議会 映画法案議事概要

内務省・文部省
昭和14年

昭和14年に映画法が制定、公布された。戦前・戦後を通じて国家による唯一の文化立法と称された法律の誕生は、単なる映画分野に止まらない社会的な影響力を持った。本資料では、国家の理念、時代の要求、そして取締りに対する官憲の姿勢が、帝国議会の審議と討論の記録として明らかにされている。戦時体制の成立は、この部外秘の内部文献にスポットが当てられることにより、新たな解釈が可

能となるであろう。

映画法解説

不破祐俊／大日本映画協会
昭和16年

†解説〔アーロン・ジェロー〕

国家の映画統制は独占的に内務省警保局の主務であり、警察当局内の風俗警察によって取締りが強制された。このような新体制に対応して文部省から積極的に映画法制定に参画した筆者が作成した解説書である。当時数多く刊行された手引きや解説書のなかで最も権威あるものとして映画界でも必読の書となった。筆者はその後情報局に栄転、業界の戦時統制再編成にも積極的な推進力を果したことでも知られている。

†解説〔アーロン・ジェロー〕

◆第9巻◆

朝鮮映画統制史

高島金次著
朝鮮映画文化研究所／昭和18年

終戦までの34年にわたる日本統治によって、韓国映画はその植民地支配下に置かれてきた。直接的には朝鮮総督府体制が施行されたが、そのなかから草創期には羅雲奎（ナ・ウンギュ）監督により歴史的な『アリラン』が製作されて、民族の金字塔を打建て、以後様々の障害を乗り越えて、韓国映画はその民族の灯を守り続けてきた。しかしそれが臨戦体制措置によって内鮮一体の皇民化が強制されるとともに、朝鮮映画令の発布によってすべての映画製作活動は一社に統合された。本書はその実態が、一朝鮮映画人の手によって克明に記された貴重なドキュメントである。

†解説〔牧野　守〕

◆第10巻◆

アジア映画の創造及建設

市川彩著／国際映画通信社出版部・大陸文化協会本部／昭和16年

映画興行分野の業界通信の主筆として常に業界のオピニオンリーダー的立場にあった筆者は、その情報網に礎づき国内ばかりではなく、植民地、朝鮮、台湾、そして満洲などの支配地域や華北、中華などの占領地の映画の実態に精通し、時局に対応した映画国策推進の第一人者でもあった。本書は彼の数多くの国策映画論を代表するものであるが、一面、戦前の朝鮮や台湾を始めアジア諸国の映画状況を歴史的に把握していることからも、今日では基本文献資料としてアジア各国からも評価されている。

†解説〔村山匡一郎〕

▼第Ⅱ期▲映画のモダニズム期

◆第11巻◆

映画芸術史

岩崎昶著／世界社／昭和5年

黄金の二十年代、我が国は映画芸術の曙を迎えた。ドイツ表現主義の洗礼を受けた新進のシネアストとして登場した筆者が発表した本書は、彼にとっては処女出版であったにもかかわらず論壇に大きなセンセーションを起した。優れた時代感覚と瑞々しさの横溢する筆致で、多くのシネアストを魅了した。彼はこのなかで、新興芸術としての映画の方向を示唆することになったが、これを契機としてスタートするプロレタリア映画運動の原点となった。こうして岩崎は、論壇上の雄としての地位を獲得するに到ったが、そのことはまた戦前戦後の茨の道を一貫して歩んだ数少ない評論家として、歴史に記録されることになるのである。

†解説〔藤木秀朗〕

◆第12巻◆

活動写真の保護と取締

柳井義男著
有斐閣／昭和4年

民衆娯楽の花形としての映画に法的規制が下されたのが大正14年、初めて全国的に統一した取締法規が施行された。この法律は世界的にも特異な性格をもち、風俗から公安にいたるまで、後世、周知の検閲取締りに猛威を振った。本書はこの法律の立法化の第一人者である筆者によって作成された。当時でも例外的な、司法当局の第一次資料を駆使した法律制定にもとづく解説書であり、その理念を提起した理論書である。しかも、現在では議論の的となっている「活動写真の保護」、つまり映画の著作権法規に関する項目を二大構成要素の一つと位置付けている。このことは、我が国の本格的な取組以前の先行的事例としても、突出した最初の著作として数少ない基本文献なのである。この大系によって初めて完全な型で復刻された意義も大きい。

†解説〔加藤厚子〕

◆第13巻◆

新集 板垣鷹穂映画論集（牧野守編）

『新しき芸術の獲得』（天人社、昭和5年）『現代的芸術の諸相』（六文館、昭和6年）『観想の玩具』（大畑書店、昭和8年）『現代日本の芸術』（信正社、昭和12年）『写実』（今日の問題社、昭和18年）より。二十世紀の初頭、ヨーロッパは戦争と革命の動乱の渦中にあった。ここから発生した思想、文化、芸術は世界を巻き込んで世紀末から新世紀へと大きく揺れ動いた。その実態を身近に体験した美術史研究者の筆者は、旧い表現体系から脱して、新しい時代が創出したジャンルに関心を抱いて帰国した。美術、文学、演劇からファッション、デザイン、フォト、そしてその一つに新興芸術を代表する映画があった。新帰朝の板垣の旺盛な意欲で、新しい時代の芸術を多面的に論じた多数の著書は、最先端の理論動向を反映した新鮮な内容で時流に即して注目された。しかしながら映画に関しては、本大系によって初めて、単独に映画分野のみを復刻版として実現し、板垣の映画論を通覧することが可能となった。そこには、二十年代から三十年代にかけて大きく変貌する我が国の文化状況に対応した、筆者の多様な顔ぶれの軌跡を読み取ることにもなるのである。

†解説〔田中眞澄〕

◆第14巻◆

日本映画論

岸松雄著／書林絢天洞／昭和10年

娯楽の殿堂、活動写真館、やがては映画館に寝食も忘れて入り浸る活キチ（活動気狂い）が群をなした。そのなかから常連の投稿家が生まれ、相互の腕を競い合った。その様な出自の一人として、映画評論家として大成したのが筆者である。彼の交流の広さは抜群で、仲間と同人を組み、運動に参画し、次々に同人誌を刊行しては潰し、やがて映画界に出入りして、同世代の映画人たちと口角泡をとばして日夜を問わず議論をかわし、そこから山中貞雄や小津安二郎といった監督たちを見出し、夢中になって彼らの作品を世に送り出した。岸の第一回評論集はそういう時代の熱気の中から生まれた。最も日本的な、それでいて国際的視野に満ちた理論展開は、この時代を代表する異色の映画人の言説として知られている。

†解説〔田島良一〕

◆第15巻◆

表現派の映画

工藤信之助著／中央美術社
大正12年

サイレント期の黄金時代、海外の名作や巨篇がスクリーンに次々と登場した。ドイツの表現主義作品が、本国とほぼ同時期に日本に輸入されて、巷間の話題を独占した。演劇、絵画、音楽でも、旧体制を否定し新時代を謳歌するこのイズムに、若者たちは熱狂した。しかし、そこには対立や批判といった激しい論争も起った。本書はこの様な状況下で刊行されたユニークな評論集である。時代が表現主義にどう対応し、受容しようとしたか、拒否したのか。独自の見解の提示が今日でも新鮮さを失っていないことは興味深い。

†解説〔曽根幸子〕

欧米映画論

内田岐三雄著／書林絢天洞／昭和10年

映画が芸術論として登場することで、最も尖鋭的な理論展開となったのは、アバンギャルド、実験映画と称された作品に対してである。内田は早くから欧米の前衛的作品、その運動や理論に注目した。そして、彼の生きた時代はこの前衛映画が一世を風靡した例外的な時代でもあった。それは近代化都市の形成と社会的な階級闘争の激化、思想的な革命意識の昂揚と深く関り合っている。筆者の内田はアバンギャリストとして、独自の映画論にもとづきシュールレアリズム映画を評価することで先駆的な役割を果した。

†解説〔那田尚史〕

◆第16巻◆

活動写真経済論

石巻良夫著／文雅堂
大正12年

国産奨励と映画事業

根岸耕一著
日本活動写真／昭和元年

映画を産業として、また経済面から分析的に論じた映画書として、最も先進的で、しかも本格的な取組の顕著な両書が、この巻を構成している。石巻と根岸という二人の筆者は、一人は映画館経営、興行界出身、もう一方は映画製作分野の経営者というスタンスの違いがあるが、共通して映画の近代化のために事業体制の合理化を図り、経営基盤をどう形成するか、そのことによって結果的には欧米に対抗した映画の質的向上に附与するか、という問題意識に二人は立脚していたのである。当時から、この様な先駆的見解を世に問い、そのための意識変革に尽力したことで、彼等の存在が業界に大きな影響力を行使することになったことは無視出来ないであろう。しかも、映画産業という分野のパイオニアとして、前近代的な興行形態の体質改善のためのガイドブックとしてばかりではなく、近代の文化経営学への道筋を開拓した点からも評価される理論書である。

†解説〔アーロン・ジェロー〕

◆第17巻◆

トオキイ以後

飯島正著／厚生閣書店
昭和8年

筆者の飯島は、岩崎昶（第11巻）とならび称される日本映画界の代表的な評論家である。彼の数多くの評論集のなかから、トーキーの出現によって大きく変革を余儀なくされた映画状況を主体的に論じた本書を加えた。飯島はトーキーに懐疑的な見解が大多数を占める当時の映画界にあって、少数派の賛成論者であった。故に、本書も単なる技術論といった同時期に刊行された多くの啓蒙書、ハウツーものとは全く異なる、本質的な理論書である。実は終生映画評論家として知られている飯島の基盤は文学者、特に海外文学理論の紹介者としてのスタンスにある。近代の西欧的な知性の持ち主として、ここに培われた人間に対する深い洞察力の思考が、映画を単なる娯楽から、より内面的な表現への追求へと転位していった。本書は彼一流の鋭い感性と分析力によって、この転換期のダイナミズムの歴史的な証言となっている。

†解説〔村山匡一郎〕

◆第18巻◆

純粋映画記

北川冬彦著／第一芸文社／昭和11年

北川は著名な現代詩の詩人である。しかも映画評論家として優れた評論集を幾種類も刊行していることでも知られている。本書はその北川が最初に発表した映画評論書である。彼のユニークさは、文学者としての観点から詩の言語表現を昇華して、映像空間へのイメージと対峙させた。そこから文学としてのシナリオ、シネ・ポエムの運動、言語叙述のイメージ創設などといった、言語表現と映像表現の本質的なテーマに挑戦した理論家としても大きな足跡を残している。

†解説〔十重田裕一〕

◆第19巻◆

現代映画論

箸見恒夫著／西東書林／昭和10年

日本の代表的な評論家の一人である箸見は、もう一方では、敏腕の宣伝マン「東和の箸見」として知られている。戦前・戦後の数々の名作が彼の手によって世に送り出され、ヒットし、時には社会的なブームを捲き起した。しかし、この二つの面は彼にとっては矛盾したものではなく、宣伝も彼の批評活動の一端であった。小学校も満足に卒業しなかった箸見が、映画館を教室とし、作品をテキストとして学ぶことから到達した彼の特異な感性と言説が、この時代をどうとらえ、分析しているのかも、本書を通じて明らかになるであろう。

†解説〔牧野　守〕

◆第20巻◆

映画と批評

津村秀夫著／小山書店／昭和14年

映画批評家Qあるいは北載河のペンネームで、特に戦前から戦中にかけて、国策映画のスポークスマン的存在として認知されている筆者の処女批評集である。この津村の権威的な言動によって、むしろ彼は映画論壇でも孤立した存在であった。彼は一途に、低俗的な娯楽作品を批判し、映画芸術への厳しい創造活動を論及した。翻って、商業主義の製作体制にメスを入れ、現代芸術としての作品の完成度を称揚した。そして、時代の要求する志の高い国家的規範となるナショナル・アイデンティティを映画に求めた。彼の映画への並々ならぬ理想主義は、やがて敗戦とともに破綻することになったが、本書で展開した筆者のマニフェストは、時局の便乗者としての評価に止まらない理念が前提となっていたと指摘できる。改めて七十年を経過した今日、津村を通じて、日本の現実、その映画状況がなんであったかという、本質的な理論分析が可能となる手掛りを与えてくれる。

†解説〔ピーター　B・ハーイ〕

▼第Ⅲ期▲活動写真の草創期

◆第21巻◆

明治期映像文献資料 古典集成①

（牧野守編）

『形似神韻触背美学』（中川重麗／博文館／明治44年）『自動写真術』（大東楼主人／明治30年）『実地応用近世新奇術』（豊州散士／博知堂蔵版／明治29年初版／明治30年訂正再版）『活動写真説明書／附エジソン氏史伝』（駒田好洋／明治30年）『活動写真術自在』（同塵市隠／明治36年）『活動写真の話』（児童理科叢書第四扁／若月保治／朝報社／大正元年）『吾輩はフィルムである』（岡村紫峰／活動写真雑誌社／大正6年）。明治期の近代化のドラスティックな変革と、映画の黎明期とがジャストミートしたことを見逃すことは出来ない。つまり、大衆娯楽の王座に君臨した映画館は都市化の盛り場の中心的存在を占め、時代の花形と認知されるようになった。そこで上映される作品は夢の工場といわれた撮影所で次々に生産され、そこに群がる映画業界の多種多様な人種が創作に取り組むベルトコンベアーシステムを確立した。こうしてそこで起こった出来事や一挙手一投足は注目の渦となり、映画をとりまく映画ジャーナリズムも批評分野や芸術論その技術や開発メカニズムといった論壇も形成されるようになった。この時代を先取りした尖頭的なジャンルに対して、多種多様な活キチが積極的に発言した。当時の旺盛な文献の記録はすべて残されている訳ではないが、映画興行、映画製作そして映画ジャーナリズムあるいは観客の心理や嗜好といった面も含めて、文化面のサブカルチャーやメディア論といった現代的な分野を包摂して記述されている。この復刻版に収録された文献やデータは草創期の活動写真（映画）の発生から成立の経過を研究調査し、分類及び分析の方法論を提示している。これらの著者も百家争鳴といった趣があって、プロとしての職業的な専門家が輩出する以前の映画ファンが大勢を占めていた。新しく登場した媒体に対するそれぞれの独自の多様な問題提起が発生した。近現代史上の新世紀は「戦争と革命」の世紀と称され、歴史の映像での記録が可能となり、文字媒体に止まらず、視覚認識と視覚表現が拡充するようになって、新しい時代の成立に貢献していった。

†解説〔牧野　守〕

◆第22巻◆

明治期映像文献資料 古典集成②

（牧野守編）

吉澤商店『幻燈器械及映画並ニ活動写真器械及附属品定価表』（明治38年）『活動写真器械同フィルム（連続写真）定価表』（明治39年）『活動写真器械同フィルム（連続写真）定価表』（明治41年）『仏国パテー会社製 英国アルパン会社製 其他諸会社製 活動写真フィルム正価表』（明治41年）『幻燈器械及映画活動写真器械及附属品定価表』（明治42年）『活動写真器械同フィルム（連続写真）定価表』（明治43年）、および通俗教育調査委員会『幻燈映画及活動写真フィルム目録 明治四十四年度選定及認定』（明治45年）。主として草創期、明治年代の輸入配給、上映業者の映画目録を収集した。その中心は代表的な吉澤商店の出版物である。これらの目録は吉澤商店の

販売価格の内、作品のプログラムや写真器械などの輸入品で、活動写真と幻灯、それに蓄音機、双眼鏡などが大半を占めている。いずれも諸外国から直輸入された商品カタログなのだが、時代の進むうちに国産の機械や製作したフィルムが登場してくるのは興味深い。日本映画誕生の実記的記録が成立している。日本文化また日本芸術分野の萌芽から生成への段階が裏付けられるということ自体、数少ないケースであろう。その手がかりとして、これらのデータが日本の近代文明の成立の貴重な記録となりうるということで、今後の基本資料として無視することは出来ない。

†解説〔入江良郎〕

◆第23巻◆

活動写真百科宝典

梅屋庄吉著／日本活動写真株式会社／明治44年

草創期の啓蒙的なエンサイクロペディアとして刊行された本書の筆者が梅屋庄吉というユニークな映画人であることが興味深い。梅屋は単に映画興行界で成功した経営者であるばかりではなく、政治的にも国際的な視野の持ち主で、中国革命の孫文を助けて、物心両面にわたり重要な役割を果たしたことが、歴史に残っている。しかも映画という近代文明に着目して新時代を演出した明治期に生きたスケールの大きい日本人として、アジアにも広く影響をもたらしたという点でも、梅屋の足跡を知る手掛りとなる欠かすことの出来ない基本文献資料であろう。

†解説〔ピーター B・ハーイ〕

◆第24巻◆

活動写真の原理及応用

権田保之助著／内田老鶴圃／大正3年

筆者の権田保之助は民衆娯楽研究者として、映画分野の研究の第一歩を印したアカデミックな存在として早くから知られている。この著書は、まだ言説の成立しない時代において、映画のエンサイクロペディアの概説として集約的に記述した先駆的な内容で、日本の水準の高さを提示したマニフェストとなった。そこでは映画の未来像の可能性を予告し、専門的言説を避け、アカデミズムに陥ることを防いだ。内容も、浅草公園の映画館を拠点として実地調査の研究一筋の姿勢を固持した、ユニークな学究的な存在であることは重要である。

†解説〔アーロン・ジェロー〕

◆第25巻◆

活動写真劇の創作と撮影法

帰山教正著／正光社／大正6年

草創期において重要な役割を果たした帰山教正は、もともとは映画雑誌の常連の投稿者の一人として、映画ファンの立場で映画界に出入した。そこでの作品批評の論点は、商業主義を否定し反体制に徹していた。やがて自説にもとづき映画製作に着手して、アバンギャルドの手法での作品を数々に完成した。常に不遇ではあるも、理想主義を貫き通した。本書は彼のそういう姿勢を反映した記述で、以後の映画の方向を示唆している。

†解説〔那田尚史〕

映画戯曲論

田村俊夫著／青文カビネット／大正14年

第一次大戦後にドイツに留学し、ドイツ表現主義の影響を受けた筆者が、映画・演劇・文学などのジャンルをこえて表現手段の多様性を追求、再検討する気運の中で発表したのが本書である。帰国後、ドイツ表現主義の代表的作家であるトラーの戯曲「ヒンケマン」を翻訳し、それと併行して本書を自費出版で刊行した。日本において智識が貧弱であると筆者が考える小説、戯曲を論じ、それらを元にして映画の芸術的表現を追求しようとする本書は、小説家や戯曲家の参考にもなるように意識して書かれている。筆者のそうした意識や活動は、一九二〇年代の日本の戯曲ブーム、異なるジャンルから学びあい新しい表現様式を模索するモダニズムの潮流、ドイツ表現主義が注目され盛んに紹介された時代状況と合致しており、本書は一九二〇年代の日本の芸術界を知る上で非常に興味深い著作である。

†解説〔十重田裕一〕

◆第26巻◆

社会教化と活動写真

山根幹人著／帝国地方行政学社／大正12年

山根幹人は映画研究のオルガナイザーとして映画分野に関わり、やがて撮影スタッフの一員として発言するようになった。彼のその見解は映画の大衆娯楽と教育効果といった社会的な視点にもとづく映画の水準の向上を目指すことにあった。時代の要求する検閲や規制といった措置にも正当性を認め、やがて戦時体制の国家統制に対しても妥協的であった点で、当時の映画界のスポークスマン的立場にあった。そういう意味で、ジャーナリズム分野でも草創期からニュートラルな立場を維持する時代のバロメーターの役割を果した人物であった。

†解説〔加藤厚子〕

影絵の国

橘高広著／聚芳閣／大正14年

筆者の橘高広は、立花高広というペンネームを使い分けて、大衆娯楽の近代化した都市、盛り場を論ずるとともに、警察の検閲官として風俗的規制の権限も最大に発揮するという二面性の持ち主であった。こういった硬軟の両面の他に、映画に興味をもった学生たちを糾合して研究会を主宰し、学術的な機関誌を定期刊行する活動のバックアップをはたした。この会からは特に戦時下の映画界のスタッフを輩出するなど、人材の育成に努めた面も持っている。そこでの橘の視点は、作品に描かれた視点を重視するという歓喜の受容―享楽者―への共感を第一意義とした。本書もその姿勢にもとづいて、その矛盾を提示してはいない。発展途上に登場した特異な人物である。

†解説〔波多野哲朗〕

◆第27巻◆

東京に於ける活動写真

文倉平三郎著／雨潤会／大正8年

草創期ならでは考えられない私家版稿本の復刻版である。なぜこの様な原稿が記述されたのか。そして映画研究に取り組むことが可能となったのかは、この時代を抜きにしては考えられない。筆者の経歴も不明の扱いで、古くから未刊の珍重すべき奇書として長く放置された原稿が、復刻版として日の目を見ることになった。本書の内容が明らかにするように、単なる好事家的な意欲に止まらず、学際的な意図にもとづく埋もれた映画史家の登場によって、これまでの日本映画史の研究が在野の研究者による実証主義的な調査のデータ提供に対し、検証や評価も不十分なままの問題提起が、この復刻によって新しい段階に到達したことを明らかにしている。こうして文倉平三郎の映画研究における実証主義的研究のパイオニアの一人としての位置付けが可能となった。草創期の活動写真の俗悪な見世物視を偏見として対峙し、娯楽、教育上の重要な意義があると積極的に援護する評価を、現実のアップ・トゥー・デイトの雑誌や新聞などのパブリシティーの動向にもとづいてコラムや記事の切り抜きで記述している。この筆者の並々ならぬ活キチの情熱が、このような実証的資料を後世に残すことになったと受けとめられるであろう。

†解説〔小林貞弘〕

活動写真の知識

小路玉一著／誠文堂書店／昭和2年

本書が刊行された一九二〇年代は、無声映画の黄金期を経て、一九一〇年代の純映画劇運動の勃興期に到達していた。そこで映画論壇やジャーナリズムといった言説の傾向も大きく変貌を遂げている。筆者の小玉は市井の一活動ファンであったのだが、彼をしてこの様な一般向けの啓蒙書を発表した意図は、映画を時代のメディアとして位置付け、その特長や前提となった現代の発明のなんたるものかを提示しようとしたに他ならない。視覚認識によって新しい世紀の表現が登場することになった受容の無限大の可能性を提示しようと意図したに違いない。映画黎明期の最中にあった、まさに時代の証言者、申し子である。

†解説〔村山匡一郎〕

◆第28巻◆

映画及映画劇

寺川信著／大阪毎日新聞社／大正14年

本書は一九二〇年代に入って、主として関西でジャーナリストとして活躍した筆者によって記述された、映画文化の多面的様相を記録にまとめた意欲的な文献である。筆者の寺川は黎明期の映画ファン（活キチ）として映画館に熱狂的に通った体験の持ち主として、以後、仲間と研究会を糾合して多様な映画の体系化を試みた。すぐれて近代的な所産の映画の特長をより具体的視点から論及し、社会と

芸術の先端的担い手と定義することで、その当時の映画言説の展開に共通する論旨が流れている。そういう意味で黎明期の世代のシンボル的な記述のケーススタディーとして見ることが出来る。映画を語る熱っぽさはこの年頃の口調をそのままに止めている。こういう時代を経験して、映画は安定した新しい純映画劇運動に進展していくのである。

†解説〔藤木秀朗〕

映画劇概論

川添利基著／駿南社／昭和2年

一九二〇年代の無声映画の絶頂期にあって、この時代を反映した理論書が、本格的な映画美学を確立しようとした筆者によって刊行された。このような言説の特長的な傾向として、次のトーキー時代の開花する前夜にあってサイレント映画の完成された表現を重視するとともに、映画劇の発展形式と芸術を成立する条件として定義するといった、当時の過渡期の映画状況下の制約のなかで追及する前向きの姿勢が感じられる。こうして映画劇の本質、さらに映画劇の芸術的可能性を追求することで、筆者自身の映画体験を土台として映画ファンの原点にもとづく映画理論の構築を目指したモデルケースとして存在したユニークな文献であろう。

†解説〔曽根幸子〕

◆第29巻◆

活動写真の種明かし

浦島三郎著
東洋出版社／大正11年

この映画黎明期の活キチのもう一つのタイプとして登場するのが、筆者の浦島三郎である。無邪気で熱烈な映画ファンであった浦島の情熱が時代を越えて今日の読者にも伝わってくる。浦島が描いた一九二〇年代の映画の世界には、浦島の演技者、つまりスクリーンのアイドルスターたちに魅了されるとともに、特に外国映画（洋画）の代表であるアメリカ映画に没頭して、アメリカ映画のすべての価値観を発見することに集中した。この様な直接に体験した浦島の目を通して映画の魅力の謎が解明される。この映画の魔術の渦中に在って、その熱気を伝える口調は時空を越えて、今日の読者に衰えを感じさせない臨場感に満ち満ちている。

†解説〔阿部　マーク・ノーネス〕

日本映画界事物起源

吉山旭光著／シネマと演芸社／昭和8年

草創期のパイオニアの代表的評論家であり映画史家でもある吉山旭光は、ノスタルジックな存在ではなく、今日でも歴史研究者にとって新しい問題提起を迫ってくる。それは映画渡来以前の映画前史における我が国の映像認識の発生、つまり視覚観念の形成についての新しい世界観を成立させようとした言説の進展を意図してきたことであろう。これらの歴史に対する新しい見解によって、歴史の見直しが可能となった。今回の復刻版において、吉山の二つの著書に対する新旧の異なったスタンスの両解説者の吉山旭光評によって、我が国の歴史研究の方法論の差異を違った視点でアプローチすることになった。映画史の歴史観、年表の分析、分類項目という検討事項は、これからの世代に問題として未解決のままに提起されている。

†解説〔田島良一〕

日本映画史年表

吉山旭光著／映画報国社
昭和15年

本書解説者の一人である田島氏のオーソドックスなアカデミズムの研究の集大成に対し、新しい史家としての板倉氏の視点は、吉山の従来の時代状況に伴う映画の発達史観のステレオタイプに論及して吉山の日本映画史観の独創的な言説の発想をどう発展させて受け継ぐかという根幹的な問題があることを指摘しているのを無視することは出来ない。

†解説〔板倉史明〕

◆第30巻◆

日本少年〔活動写真号〕

実業之日本社
大正11年10月

映画黎明期の映画館の熱気の溢れるなかで、少年少女の群が目立つような社会現象が話題になっていた。映画ファン、つまり活キチの映画に影響されて、ケンゲキゴッコやジゴマ遊びに夢中になり、長じてグループを結成し、映画批評を筆にして投稿に覇を競う傾向も生じた。この時代の活字媒体として少年少女向けの月刊誌が発売され、これらの雑誌は映画特集など、読者の興味を集める企画を狙った。当時の少年少女向けの代表的な雑誌『日本少年』の活動写真号の特集は、この様な情況を身近に確かめることの可能なモデルケースとして復刻版で再現することにした。ほぼ百年前の雰囲気をありのままに伝達する媒体の好例として、この時代の類例を生のまま発掘、復元して以降の研究調査の可能性に結びつけたい。

†解説〔牧野　守〕

芸苑秘録 水のなかれ

桑野桃華著
連合演芸通信社／昭和9年

筆者の桑野桃華は明治の新時代に登場した興行分野の芸能ジャーナリズムで活躍した現場出身の記者として、明治から大正、昭和初期まで芸能メディアに健筆をふるったキャリアの代表的な存在である。その彼が戦時下のメディアの統廃合によって筆を折るまでの五十年間の歳月の日々刻々の見物録を回顧したメモランダムとしてまとめたのが本書である。つまり劇場雀の楽屋裏の探訪記事が主体になっている。とは言っても、単に回顧録に止まらず、芸能分野に時代の風雲児として登場した映画のインパクトを鮮明な記録として記述している点からみても、黎明期の映画、つまり大衆文化の発生から成立にいたる過程を検証する貴重な証言として重要な資料たり得る。芸能興行新聞として演劇や映画の関連性の強い発言はこれからの研究にとって無視できない歴史書である。

†解説〔田中眞澄〕

最尖端民衆娯楽映画文献資料集

◎昭和初期の映画と当時の尖端風俗の文献集成。編年体で構成しそれぞれの時代性を反映。

［監修］牧野守　全18巻

●第一回配本　2006年6月刊行予定
全8巻揃予価：本体120,000＋税

①ジゴマ（明治45年）②探偵奇談 女ジゴマ（明治45年）③江澤春霞『活動写真日本ジゴマ』（大正元年）④三楽流子・小生夢坊・小ぐら生『女盛衰記 女優の巻』（大正8年）⑤岡村紫峰『活動写真名鑑』前編（大正12年）⑥牛原虚彦『映画万華鏡』（昭和2年）⑦田中栄三『彼をめぐる五人の女』（昭和2年）⑧朝島黎吉『キネマの人々』（昭和2年）

●第二回配本　2006年12月刊行予定
全10巻揃予価：本体143,000円＋税

⑨帰山教正『映画の性的魅惑』（昭和3年）⑩羽太鋭治『キネマ・スターの素顔と表情』（昭和3年）⑪六車修『映画の小窓』（昭和3年）⑫酒井真人『映写幕上の独裁者』（昭和5年）⑬上山草人『素顔のハリウッド』（昭和5年）⑭小倉浩一郎『世界映画風俗史』（昭和6年）⑮立花高四郎『これ以上は禁止—ある検閲係長の手記—』（昭和7年）／原比露志『猥映画と性映画』（昭和7年）⑯小林いさむ『映画（キネマ）の倒影』（昭和8年）⑰玉木潤一郎『日本映画盛衰記』（昭和13年）⑱田島太郎『検閲室の闇に呟く』（昭和13年）

日本映画論言説大系 全30巻

［監修］牧野 守

●全30巻揃定価610,050円（本体581,000円）　A5判上製／クロス装／函入　ISBN4-8433-0938-9 C3374

第Ⅰ期　全10巻　【戦時下の映画統制期】

揃定価157,500円（本体150,000円）　ISBN4-8433-0939-7 C3374

■第 1 巻	上野耕三『映画の認識』／相川春喜『文化映画論』	定価15,750円（本体15,000円）	ISBN4-8433-0940-0
■第 2 巻	関野嘉雄『映画教育の理論』	定価17,850円（本体17,000円）	ISBN4-8433-0941-9
■第 3 巻	清水光『映画と文化』	定価13,650円（本体13,000円）	ISBN4-8433-0942-7
■第 4 巻	長江道太郎『映画・表現・形成』	定価13,650円（本体13,000円）	ISBN4-8433-0943-5
■第 5 巻	長谷川如是閑『日本映画論』	定価14,700円（本体14,000円）	ISBN4-8433-0944-3
■第 6 巻	沢村勉『現代映画論』	定価15,750円（本体15,000円）	ISBN4-8433-0945-1
■第 7 巻	杉山平一『映画評論集』／谷川徹三『芸術小論集』（抄録）	定価13,650円（本体13,000円）	ISBN4-8433-0946-X
■第 8 巻	『第七十四回帝国議会 映画法案議事概要』／不破祐俊『映画法解説』	定価21,000円（本体20,000円）	ISBN4-8433-0947-8
■第 9 巻	高島金次『朝鮮映画統制史』	定価14,700円（本体14,000円）	ISBN4-8433-0948-6
■第10巻	市川彩『アジア映画の創造及建設』	定価16,800円（本体16,000円）	ISBN4-8433-0949-4

第Ⅱ期　全10巻　【映画のモダニズム期】

揃定価193,200円（本体184,000円）　ISBN4-8433-0950-8 C3374

■第11巻	岩崎昶『映画芸術史』	定価12,600円（本体12,000円）	ISBN4-8433-0951-6
■第12巻	柳井義男『活動写真の保護と取締』	定価38,850円（本体37,000円）	ISBN4-8433-0952-4
■第13巻	牧野守編『新集 板垣鷹穂映画論集』	定価25,200円（本体24,000円）	ISBN4-8433-0953-2
■第14巻	岸松雄『日本映画論』	定価15,750円（本体15,000円）	ISBN4-8433-0954-0
■第15巻	工藤信之助『表現派の映画』／内田岐三雄『欧米映画論』	定価23,100円（本体22,000円）	ISBN4-8433-0955-9
■第16巻	石巻良夫『活動写真経済論』／根岸耕一『国産奨励と映画事業』	定価14,700円（本体14,000円）	ISBN4-8433-0956-7
■第17巻	飯島正『トオキイ以後』	定価13,650円（本体13,000円）	ISBN4-8433-0957-5
■第18巻	北川冬彦『純粋映画記』	定価12,600円（本体12,000円）	ISBN4-8433-0958-3
■第19巻	筈見恒夫『現代映画論』	定価15,750円（本体15,000円）	ISBN4-8433-0959-1
■第20巻	津村秀夫『映画と批評』	定価21,000円（本体20,000円）	ISBN4-8433-0960-5

第Ⅲ期　全10巻　【活動写真の草創期】

揃定価259,350円（本体247,000円）　ISBN4-8433-0961-3 C3374

■第21巻	牧野守編『明治期映像文献資料古典集成①』	定価28,350円（本体27,000円）	ISBN4-8433-0962-1
■第22巻	牧野守編『明治期映像文献資料古典集成②』	定価28,350円（本体27,000円）	ISBN4-8433-0963-X
■第23巻	梅屋庄吉『活動写真百科宝典』	定価24,150円（本体23,000円）	ISBN4-8433-0964-8
■第24巻	権田保之助『活動写真の原理及応用』	定価23,100円（本体22,000円）	ISBN4-8433-0965-6
■第25巻	帰山教正『活動写真劇の創作と撮影法』／田村俊夫『映画戯曲論』	定価24,150円（本体23,000円）	ISBN4-8433-0966-4
■第26巻	山根幹人『社会教化と活動写真』／橘高広『影絵の国』	定価25,200円（本体24,000円）	ISBN4-8433-0967-2
■第27巻	文倉平三郎『東京に於ける活動写真』／小路玉一『活動写真の知識』	定価26,250円（本体25,000円）	ISBN4-8433-0968-0
■第28巻	寺川信『映画及映画劇』／川添利基『映画劇概論』	定価25,200円（本体24,000円）	ISBN4-8433-0969-9
■第29巻	浦島三郎『活動写真の種明かし』／吉山旭光『日本映画界事物起源』『日本映画史年表』	定価27,300円（本体26,000円）	ISBN4-8433-0970-2
■第30巻	「日本少年」〔活動写真号〕／桑野桃華『芸苑秘録 水のなかれ』	定価27,300円（本体26,000円）	ISBN4-8433-0971-0

ゆまに書房 YUMANI SHOBOU
〒101-0047 東京都千代田区内神田2-7-6
TEL .03（5296）0491
FAX.03（5296）0493
http://www.yumani.co.jp/
e-mail eigyou@yumani.co.jp

●特におすすめしたい方　映画史、メディア史、思想史、社会史、文化史、風俗史、モダニズムなどの研究者・研究機関。大学図書館。海外の日本学関連研究施設など。

ご注文書

ゆまに書房　Tel.03（5296）0491／Fax.03（5296）0493　年　月　日

日本映画論言説大系 全30巻 ●揃定価610,050円（本体581,000円） ISBN4-8433-0938-9 C3374	第Ⅰ期・全10巻 定価157,500円（本体150,000円）	セット
	第Ⅱ期・全10巻 定価193,200円（本体184,000円）	セット
お名前	第Ⅲ期・全10巻 定価259,350円（本体247,000円）	セット
ご住所　TEL　（　　）	●全30巻揃	セット

取扱店

※毎度ありがとうございます。お申し込みはぜひ当店へ。

HP

06.04/01.7000.H